

山陽新聞夕刊

[一日一題]

【傾聴と共感】

「傾聴と共感」

岡山市病院事業管理者、岡山市立市民病院長 松本健五

医師「このような理由で手術が必要になると思いますが、どうしましょうか？」

患者「手術してください」

医師「なぜ手術が必要かわかりましたか？」

患者「え？？？」

これが現状ではないでしょうか。

医師にとっては毎日の出来事でも、患者にとっては驚天動地、知識も何もないわけですから何を聞いていいかも分かりません。また緊張もしています。医師は患者、ご家族の状況をよく理解し、傾聴と共感をもって説明する必要があるでしょう。患者・家族がうなずいて聞いているのでよく理解していると多くの医師は思い込みます。実際は違うことが多いのです。患者、ご家族は遠慮せず感じたことを質問されることも必要でしょう。聞きたいことをあらかじめメモしておくのもひとつの方法です。「無知は罪」、「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」なのです。誤解が不幸をよびます。大事な的是お互いが病気と立ち向かう仲間だという意識と、病気に打ち勝つという目標を共有することだと考えます。患者、家族と医療関係者の意識のずれ、ギャップが現在の医療を難しくしている一因でもあります。「トラブルも日頃の関係ボヤで済む」です。理解しようとする心、謙虚な心、感謝する心、理解しようとする心、親しもうとする心。これらの心を大事にしましょう。今後、高齢化の更なる進展から「治す」医療に加え、「よりそい、支える」医療も重要となるでしょう。

連載も今日で最後になります。これからも救急・地域医療の発展に微力ながら貢献しようと考えています。「岡山総合医療センター（仮称）」はみなさまと共に創る病院ですので今後ともよろしくお願いいたします。ありがとうございました。また、どこかでお会いしましょう。